チョーサーと聖母マリア(1)

柴　田　竹　夫

1

1500年以前の英詩において聖母マリア(the Blessed Virgin Mary) は，多くの叙情詩においてうたわれている。古英語で書かれたキリスト教詩 *The Dream of the Rood*（『十字架の夢』）において，擬人化された聖十字架は次の様に語る。

> God (wuldres Ealdor) had honored it even as He had honored Mary herself before all men, before all womankind.

これ以降も英詩において聖母マリアの力と美は賛美されていく。[1] チョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340 ?-1400) も聖母マリアの賛美と崇敬を彼の短詩 "An ABC" を初めいくつかの作品において表す。

それではチョーサーにおいて聖母マリアは、どの様に表されているのかというと、(1)処女と母性の表現，(2)女王の比喩，(3)象徴としての 'lily'，(4)象徴としての 'bush' で表されている。本稿においては，これら聖母マリアについての４つの表現のうち，(1)「処女と母性」の表現に的をしぼってチョーサーにおける聖母マリアを考察する。

「処女と母性」の表現において，聖母マリアは，次の６つの呼称（称号）で呼ばれている。すなわち「処女」にまつわる "maide", "maiden", "virgin" そして「母性」にまつわる "moder" (=mother), "lady" および「処女と母性」

にまつわる“Marie”の6つである。これら6つの呼称を順次考察し，「処女と母性」の表現からチョーサーの聖母像を探る。

2

まず処女にまつわる“maide”の呼称の検討から始める。チョーサーの作品における“maide (=maid)” sb.[1] [2] は74例 (maide 2, mayde 71, maydes 1) あり，その内次にあげる10例 (第1～9例がnounとして，第10例目がadjectiveとして) が聖母マリアを表す。[3]

(1) From false blame, and thou, *merciful mayde*, (MLT 640)

(2) “Mooder,” quod she,“ and *mayde bright*, Marie, (MLT 841)

(3) “Ey, Goddes mooder,” quod she, “*Blisful mayde!* (Sum T 2202)

(4) O *mooder Mayde*, O mayde Mooder free! (Pro PrT 467)

(5) Thow *Mayde and Mooder*, doghter of thy Sone, (SN Pro 36)

(6) Now help, thow *meeke and blisful faire mayde*, (SN Pro 57)

(7) For love of *mayde and moder* thyn benigne (Tr 5.1869)

(8) Glorious *mayde and mooder*, which that nevere (ABC 49)

(9) saaf and *his Moder the Maide*, moo then I behete. (Ast Pro 108)

(10) O mooder Mayde, O *mayde Mooder free!* (Pro Pr T 467)

これら10例において，“maide”の呼称はどの様な働きをしているかというと，それは次の3つに分類できる。

1) 祈願 (8例)

(1)：救い (聖的)　　(2)：憐れみ (聖的)

(4)：助け (聖的)　　(5)：助け (聖的)

(6)：助け (聖的)　　(7)：助け (聖的)

(9)：助け (聖的)　　(10)：助け (聖的)

2）聖母の名称（1例）

(8)

3）誓言[4](emphatic assertion)（1例）

(3)

ここでチョーサーにおける誓言(oaths)についてまとめておく。チョーサーの作品における誓言には大きく分けて2種類あると考えられる。1つはemphatic assertion（あるいは世俗的な誓言）であり，今1つはsolemn affirmation(あるいは聖的な誓言)である。[5] solemn affirmationは，"swear" v.の第一義的な意味つまり"To make a solemn declaration or statement with an appeal to God or a superhuman being, or to some sacred object, in confirmation of what is said"(*OED* 1. intra. 初出 *a* 900)にもとづくものであるのに対し，emphatic assertionは，単に話の登場人物の世俗的な誓いの内容の強調あるいは断言のねらいに供するものである。

ここで"maide"の呼称の働きに戻ると，"maide"の10例において，救い，憐れみ，助けを求めての聖母に対する祈願（8例，すべて聖的）と聖母の名称（1例）の計9例からは，チョーサーの作品において"maide"の呼称は，聖的なコンテクストにおいて使用されていることがわかる。ここでは特に聖母にまつわる「救い」，「憐れみ」，「助け」を求めての「祈願」に注目すべきである。

次に"maide"のepithet（形容辞）の吟味を通して，"maide"の姿を探る。"maide"のepithetには，次の7種類がある。すなわち(1)"merciful"[6]（1例目），(2)"bright"[7]（2例目），(3)"glorious"[8]（7例目），(4)"free"[9]（9例目），(5)"meeke"[10]（6例目），(6)"faire"[11]（6例目），そして(7)"blisful"[12]（3例目）の7つである。この7種類のepithetを通してみると，"maide"は，哀れみ深く("merciful," "meeke")，気高く，うるわしく("free", "faire")，そして天の栄光と至福(幸い)に満たされた("bright," "glorious," "blisful")聖母マリアが見えてくる。

次に「天の栄光と至福に満たされた」聖母という時の"bright," "glorious,"

“blisful”の epithet の表す意味を探る。マリアが結婚前に身ごもった時，天使ガブリエルが来てマリアに次の様に挨拶する。[13]

あなたに挨拶します，恩寵にみちたお方！
主はあなたとともにおいでになります（『ルカによる聖福音書』1.28）

この様に神は，神の子イエススの母としてマリア（「神に愛された者」の意）をお選びになったわけであるが，マリアは彼女の母の胎内に身ごもった瞬間からイエススのゆえに神の恩恵（恵み，恩寵）で満たされ，原罪を免れている。これは神学では「マリアの無原罪の御宿り（御孕(みごも)り）」(the Immaculate Conception)[14] と呼ばれるものである。神が愛する子の豊かな恩恵のおかげで，また，マリアの子となることをよしとされたその子のあがないの功徳のゆえに，マリアは人類が受け継ぐ原罪を免れているのである。[15] そしてイエスス・キリストの母として選ばれたマリアは，すべての天使や聖人を越えて神の恩恵を受け，特別な特権，力を授かる。これがマリアの epithet である “blisful” の意味である。

また聖書では，「恩恵（恩寵）」という言葉は，「神から人類に示された親切または慈悲心である。また，それを受けるに値しない者に，この親切心から与えられる贈り物」であり，[16] 「神が自分の民を愛するその愛といつくしみ，また，神が民を支える誠実さ，神が民を解放するためにいつもいっしょにいるという約束」[17] を意味しており，マリアへの神の恩恵は，マリア一人のためのものではなく，人類全体にむけられたものなのである。

次に“maide”の7つの epithet と共に，“maide”の呼称が，“moder”の呼称と関連して使用されていることに注目しなければならない。“Moder Mayde”（4例目），“mayde and Mooder”（5例目），“mayde and mooder”（7例目），“glorious mayde and mooder”（8例目），“his Moder and the Maide”（9例目），“mayde Mooder free”（10例目）と10例中6例もが“maide”と“moder”の密接な関係を示している。

聖書（『ルカによる聖福音書』1.35，『マテオによる聖福音書』1.20，『イ

ザヤ』7.14）は，イエススが，聖霊の働きによって処女マリアから生まれたと言う。しかしマリアは子を生んだ後も終生身体的処女性を失うことはない。4世紀以降，聖アウグスティヌスによる「処女が懐胎し，処女が出産し，処女のまま留った」という表現が一般に使用される。[18] カトリック神学は，Virgin Birthについて次の様に言う。[19]

> The perpetual virginity of the Blessed Virgin Mary is a dogma of the Catholic Church and has been so recognized explicitly since the 5th century..Three points are included in the dogma : the virginal conception of Jesus by Mary without any human father, the virginal birth of the child from the womb of His mother without injury to the bodily integrity of Mary, and Mary's observance of virginity throughout her earthly life.

結局“maide”と“moder”の結び付きは，聖母マリアが「処女にして母」であることを端的に示している。

“maide”の呼称を考察してみると，人々から「救い」の祈願を受ける「処女にして母」としての聖母マリアの姿が浮かぶ。

3

聖母マリアの「母性」については“moder”の呼称のところで更に検討するが，次に処女にまつわる“maiden”の呼称の吟味に入る。チョーサーの作品における“maiden” sb. and a.[20]は52例(mayden 30, maydenes 5, maydens 17）あり，その内次の2例が聖母マリアを表す。

(1) In hour of that *blisful Mayden free* (Pr T 664)

(2) Baar of thy body – and dweltest *mayden pure* –(SN Pro 48)

この2例において，“maiden”の呼称はどの様な働きをしているのかをみて

みると，この2例共が，聖母の名称としてあることがわかる。

この2例における“maiden”のepithetはどうかというと，“maiden”からは，天の栄光と至福に満たされた(“blisful”), 気高く，うるわしく(“free”), 純潔の(“pure”)[21] 聖母の姿が見える。“maiden”は“maide”と同様な意義を示していると言える。

4

続いて聖母マリアの“virgin”の呼称の考察に入る。チョーサーの作品における“virgin”[22] sb.は6例(virgine 4, virgines 1, virginem [Lat.] 1) あり，その内次の4例が聖母マリアを表わす。

(1) “Ay heryen; and thou, *Virgine wemmelees*,” (SN Pro 47)

(2) “*Glorious virgine*, of alle floures flour,” (ABC 4)

(3) “*Virgine*, that art so noble of apparaile,” (ABC 153)

(4) “and Angelus ad *virginem* he song;” (Mil T 3216)

これら4例において，“virgin”の呼称はどの様な働きをしているかというと聖母への祈願として1例，聖母の名称として3例表れる。

1）祈願（1例)

(3)：助け，導き（聖的)

2）聖母の名称（3例)

(1), (2), (4)

これら4例をみると，“virgin”の呼称は聖的なコンラクストにおいて使用されていることがわかる。

次に“virgin”のepithetをみると，2つある。すなわち(1)“wemmelees”[23]（1例目), (2)“glorious”（2例目）である。そして聖母マリアは，汚れなき，純潔の(“wemmelees”), 天の栄光と至福に満たされた(“glorious”)姿を見せる。これは“maide”のepithetの場合と比べると，“glorious”で共通し，“maiden”の場合とでは，“wemmelees”と“glorious”で共通する。つまり

聖母マリアの「処女」にまつわる“maide”, “maiden”, そして“virgin”の epithet を比べると，「汚れなき，純潔の，天の栄光と至福に満たされた」聖母マリアがいる。

5

次に聖母の「母性」にまつわる“moder”の呼称を検討する。チョーサーの作品における“moder”（＝mother）sb.[24]は100例（moder 18, modir 5, mooder 70, moodres 7）あり，その内次の31例が聖母マリアを表す。

(1) In hym triste I, and in his *mooder deere*, (MLT 832)

(2) “*Mooder*,” quod she, and mayde bright, Marie, (MLT 841)

(3) Til *Cristes mooder* - blessed be she ay! - (MLT 950)

(4) “Pees,” quod oure Hoost, “for *Cristes mooder deere!* (Sum T 1762)

(5) “Ey, *Goddes mooder*,” quod she, “Blisful mayde!” (Sum T 2202)

(6) “God blesse us,” and *his mooder Seinte Marie!* (Mer T 2418)

(7) O *mooder Mayde*, O mayde Mooder free! (Pro Pr T 467)

(8) O mooder Mayde, O *mayde Mooder free!* (Pro Pr T 467)

(9) Of *Cristes mooder*, hadde he in usage, (Pr T 506)

(10) Oure blisful Lady, *Cris mooder* deere, (Pr T 510)

(11) Of *Cristes mooder*?” seyde this innocent. (Pr T 538)

(12) On *Cristes mooder* set was his entente. (Pr T 550)

(13) Of *Cristes mooder* that, to hire to preye, (Pr T 556)

(14) And evere on *Cristes mooder* meeke and kynde (Pr T 597)

(15) And for the worship of *his Mooder deere* (Pr T 654)

(16) “This welle of mercy, *Cristes mooder sweete* (Pr T 656)

(17) Wepynge, and herying *Cristes mooder deere* (Pr T 678)

(18) For reverence of *his mooder Marie*, Amen (Pr T 690)

(19) Thow *Mayde and Mooder*, doghter of thy Sone, (SNPro 36)

(20) Thow *Cristes mooder*, doghter deere of Anne! (SN Pro 70)

(21) "Goddes blessyng, and his *moodres* also, (CYT 1243)

(22) ne spareth neither crist ne *his sweete Mooder*. (Pars T 558)

(23) and *his blisful Mooder*, and alle the seintes of (Pars T 1089)

(24) For love of *mayde and moder* thyn benigne. (Tr 5. 1869)

(25) For certes, *Crystes blisful mooder deere* (ABC 28)

(26) *Glorious mayde and mooder*, which that nevere (ABC 49)

(27) That cometh of thee, thou *Cristes mooder deere*. (ABC 99)

(28) Thee whom god ches to mooder for humblesse! (ABC 108)

(29) Redresse me, *mooder*, and me chastise, (ABC 129)

(30) *Mooder*, of whom oure merci gan to springe, (ABC 133)

(31) vouch saaf and his *Moder the Maide*, moo then I (Ast Pro 108)

これら31例中"moder"の呼称はどの様な働きをしているかというと，聖母への祈願として11例，聖母の別称として16例，誓言 (emphatic assertion) として２例，誓言(solemn affirmation)として２例表れる。

1）祈願（11例）

(2)：憐れみ（聖的）　(6)：救い（聖的）

(7)：助け（聖的）　(8)：助け（聖的）

(18)：慈悲（聖的）　(20)：守り（聖的）

(21)：救い（世俗的）　(24)：救い（聖的）

(29)：こらしめ（聖的）　(30)：癒し（聖的）

(31)：助け（聖的）

2）聖母の名称（16例）

(1), (3), (9), (10), (11), (12), (13), (14), (15), (16), (17), (19), (22), (23), (26), (28)

3）誓言(emphatic assertion)（２例）

(4), (5)

4）誓言(solemn affirmation)（２例）

(25), (27)

聖母に対する「祈願」(11例中10例)，聖母の名称（16例）そしてsolemn affirmation（2例）の計28例（31例中）から，“moder”の呼称はまさにsolemnな（聖的）なコンテクストのもとで使用されていることがわかる。聖母への「祈願」において聖母に対し「憐れみ」，「救い」，「助け」，「慈悲」，「守り」，「こらしめ」，「癒し」と，“maide”，“maiden”，そして“virgin”の呼称の場合以上に人々は，“moder”であるマリアに対して様々なすがるおもいを込めて，聖母の愛の恵みを得ようとする。

次に“moder”のepithetの考察を通して，“moder”の姿を探る。“moder”のepithetには9種類ある。すなわち，(1)“deere”[25]（1，4，10，15，17，25，27，例目），(2)“Cristes”（3，4，9，10，11，12，13，14，16，17，20，25，27例目），(3)“Goddes”（5例目），(4)“free”（8例目），(5)“meeke”（14例目），(6)“kynde”[26]（14例目），(7)“sweete”[27]（16，22例目），(8)“blisful”（23，25例目），(9)“glorious”（26例目）の9つである。

この9つの内(4)“free”,(5)“meeke”,(8)“blisful”,(9)“glorious”は“maide”のepithetと，そして(4)“free”と(8)“blisful”は“maiden”と，そして(9)“glorious”は“virgin”のepithetと共通している。これら“maide”，“maiden”，“virgin”，“moder”の4つのepithetを比べると，“blisful(glorious)”が共通のepithetであることがわかる。

“moder”のepithetをみると，聖なる(“sweete”)すぐれた(“deere”)，気高く，うるわしく(“free”)，心やさしく(“kynde”)，慈悲深い(“meeke”)，天の栄光と恩恵に満たされた(“blisful”，“glorious”)，神の(“Cristes”，“Goddes”)母としての聖母が姿を現わす。

“moder”のepithetのうち「神の母」に関するもの，つまり“Cristes”(13例)，“Goddes”（1例）の計14例は重要である。それは「処女にして母」(“Mayde and Mooder”19，24，26例目，“his Moder the Mayde”31例目，“mooder Mayde”7例目）である聖母マリアの「神の母」としての面が直接に現われているからである。

マリアは天の恩恵に満たされた者であるが，これは神の母として彼女が選ばれたことを意味し，その恩恵の源は，愛である神（『ヨハネの第一の手紙』

4.8) に発し，マリアの選びは，この神の愛の結果であって，キリストにおいて人類を救いあげ，神の本性にあずからせたいという永遠の望みである(『ペトロの後の手紙』1.4)。つまり，マリアの受けた神の恩恵，つまり神の母としてのマリア（マリアの「母性」）の秘義を通して，人類は神の「救い」の営みの「恩恵」を受けることができるのである。

ところで「神の母」(Theotokos, Mother of God, God-bearer, God's Mother) という称号は，エフェソ公会議 (431年) において公に定義される。カトリック神学は，「神の母」について次の様に教える。[28]

> If Mary is not truly the mother of God, then Christ is not true God as well as true man, and He is not the Redeemer of men. Mary is truly the mother of God if two conditions are fulfilled: that she is really the Mother of Jesus and that Jesus is really God.

それでは「神の母」マリアに関する「救い」の秘義とはいかなるものであろうか。それは，マリアによる「仲介」の営みを通して行なわれる Coredemption(= the Blessed Virgin Mary's cooperation with Jesus Christ in redeeming mankind)[29] と呼ばれるものである。

キリストは，神と人類とを和解させた者として「仲介者」(Mediator, Mediatrix)[30] という称号を持つ。この称号は，聖パウロの教えにもとづいている（『ティモテオへの前の手紙』2.5-6)。更にキリスト以外の者も「人々に神との一致を準備させ奉仕することによって」二次的な意味で「仲介者」と呼ばれる。[31] 神の母マリアもこの二次的な，しかし特別な意味での「仲介者」の役割を担い，その仲介は，マリアの霊的な母性(spiritual maternity)[32] に依るものであり，勿論キリストの仲介を越えるものではない。マリアは二次的な仲介者であれ，神の恩恵に満ち，特別な特権，力を授けられ，神の「救いの恩恵」を，母としての「執り成し」(intercessory) をもって人類に授ける(coredemption)。その際マリアの「執り成し」は，あらゆる人々のためにある。[33]

これまでの“moder”の呼称の検討を通して，次の様な聖母の姿が浮かぶ。それは Mediatrix（仲介者）として，人々の魂の「救い」(coredemption) の「執り成し」を人々に求められる「神の母」マリアの姿である。

6

5つ目に“lady”の呼称を検討する。チョーサー作品における“lady” sb.[34] は 361例(ladi 10, ladies 7, lady 312, ladyes 25, ladys 7）あり，その内次の21例が聖母マリアを表す。

(1) Which that he seyde was *Oure Lady* veyl ; (GP 695)

(2) Now, *Lady bright*, to whom alle woful cryen, (MLT 850)

(3) Thus kan *Oure Lady* bryngen out of wo (MLT 977)

(4) God blesse hem, and *oure lady Seinte Marie* (Int PardT 308)

(5) *Lady*, thy bountee, thy magnificente, (Pro PrT 474)

(6) For somtyme, *Lady*, er men praye to thee, (Pro PrT 477)

(7) *Oure blisful Lady, Cristes mooder deere*, (PrT 510)

(8) Was maked of *our blisful Lady free*, (PrT 532)

(9) I wol it konne *Oure Lady* for to honoure!”(PrT 543)

(10) “By oure *Lady*,” quod this chanon, “it is deere, (CYT 1354)

(11) Help, *lady bright*, er that my ship tobreste. (ABC 16)

(12) Comfort is noon but in yow, *ladi deere* ; (ABC 17)

(13) But merci, *ladi*, at the grete assyse (ABC 36)

(14) Yit, *ladi*, thou me clothe with thi grace. (ABC 46)

(15) Thin enemy and myn – *ladi*, tak heede – (ABC 47)

(16) and therfore, *ladi bright*, thou for us praye. (ABC 62)

(17) *Ladi*, thi sorwe kan I not portreye (ABC 81)

(18) Now, *ladi*, from the fyr thou us defende (ABC 95)

(19) *Ladi*, unto that court thou me ajourne (ABC 158)

(20) Now, *ladi ful of merci*, I yow preye. (ABC 173)

(21) Now, *ladi bryghte*, sith thou canst and wilt (ABC 181)

これら21例中，“lady”の呼称はどの様な働きをしているかというと，聖母への祈願として11例，聖母の名称として５例，誓言(emphatic assertion) として１例，そして誓言(solemn affirmation)として４例表れる。

1）祈願（11例）

(2)：憐れみ（聖的）　(4)：救い（世俗的）

(11)：助け（聖的）　(13)：憐れみ（聖的）

(14)：恵み（聖的）　(15)：救い（聖的）

(16)：救い（聖的）　(18)：守り（聖的）

(19)：救い（聖的）　(20)：憐れみ（聖的）

(21)：憐れみ（聖的）

2）聖母の名称（４例）

(1), (3), (7), (8)

3）誓言(emphatic assertion)（１例）

(10)

4）誓言(solemn affirmation)（５例）

(5), (6), (9), (12), (17)

これら“lady”の呼称の働きから看て取れることは，「祈願」(11例中10例)，「聖母」(４例)，“solemn affirmation”（５例）の計19例（21例中）から“lady”の呼称が主に聖的なコンテクストにおいて使用されていることである。“solemn affirmation”（６例目）における様に，*The Prioress's Tale* の序で語り手は，次の様に聖母マリアに対してMediatrix として神への「執り成し」を請願する。

For somtyme, Lady, er men praye to thee,
Thou goost biforn of thy benygnytee,
And getest us the lyght, of thy preyere,
To gyden us unto thy Sone so deere. (Pro. PrT Ⅶ 477 - 80)

次に“lady”のepithetの吟味を通して，“lady”の姿を探る。“lady”のepithetには6種類ある。すなわち，(1)“Oure”（1，3，4，7，8，9，10例目），(2)“bryght”（2，4，11，16，21例目），(3)“blisful”（7，8例目），(4)“free”（8例目），(5)“deere”（12例目），(6)“ful of merci”（20例目）の6つである。

この6つの内，(2)“bryght”，(3)“blisful”，(4)“free”，(6)“ful of merci”は“maide”のepithetと，そして，(3)“blisful”，(4)“free”，(5)“deere”は，“moder”のepithetと共通している。意味において(3)“blisful”は，“virgin”のepithet（“glorious”）と共通している。そして“maide”，“maiden”，“moder”，“lady”のepithetは，“blisful”もしくは“glorious”（天の栄光と至福に満たされた）と“free”（気高く，美しい）の2点において共通しており，意味において“blisful”（“glorions”）が，“maide”，“maiden”，“virgin”，“moder”，“lady”のepithetとして共通している。

“lady”のepithetは，他のepithetと比べると，“Oure”のepithetが特徴としてある。つまり“lady”のepithetの検討を通して次のことが言える。“free”で“blisful”な聖母マリアを“Oure Lady”（我らが婦人）と親しく呼ぶ時，“Oure Lady”に対して人々は，Mediatrix（仲介者キリスト）の「執り成し」を願っているのである。カトリック神学においては，“moder”の呼称のところで触れたMediatrixという称号を“Oure Lady”にもあてはめている。[35]

そして，聖母への「執り成し」の祈願において，これまでのチョーサーのepithetの検討における「祈願」の多様性にみるように，聖的及び世俗的な「人間的感情の表出」が伺える。中世も後期になると人間的感情が次第に表立って出てくるのである。[36]

7

最後に聖母マリア“Marie”（＝Mary）の呼称を検討する。チョーサーの作品における“Marie”は15例（marie 14，marye 1）あり，そのすべてが聖母マリアを表す。[37]

(1) *Marie* I meene, doghter to Seint Anne, (MLT 641)

(2) "Mooder," quod she, "and *mayde bright*, *Marie*, (MLT 841)

(3) But *blisful Marie* heelp hire right anon ; (MLT 920)

(4) "Twelf pens!" quod she, "Now, *lady Seinte Marie* (FrT 1604)

(5) A wyf! a, *Seinte Marie*, benedicite! (MerT 1337)

(6) And seyde, "*Seynte Marie!* how may this be, (MerT 1899)

(7) God blesse us, and *his mooder Seinte Marie !* (MerT 2418)

(8) God blesse hem, and *oure lady Seinte Marie !* (Int PardT 308)

(9) "By *Seinte Marie !*" seyde this taverner, (PardT 685)

(10) "*Marie*, I deffie the false monk, daun John! (ShipT 402)

(11) His *Ave Marie*, as he goth by the weye. (PrT 508)

(12) For reverence of *his mooder Marie* Amen. (PrT 690)

(13) "O *Seinte Marie*, benedicite ! (Thop 784)

(14) *Marie*, therof I pray yow hertely." (CYT 1062)

(15) And sayde twyes, "Seynte Marye, (HF 573)

これら15例の"Marie" の呼称はどの様な働きをしているかというと，祈願が5例，聖母の名称が2例，誓言(emphatic assertion)が7例，誓言(solemn affirmation)が1例ある。

1）祈願（5例）

(1)：救い（聖的）　　(2)：憐れみ（聖的）

(4)：助け，慈悲（世俗的）

(7)：救い（聖的）　　(8)：救い（世俗的）

2）聖母の名称（2例）

(3), (11)

3）誓言(emphatic assertion)（7例）

(5), (6), (9), (10), (13), (14), (15)

4）誓言(solemn affirmation)（1例）

(12)

これら“Marie”の呼称の4つの働きからは，何が看て取れるであろうか。聖的な祈願（3例），聖母の名称（2例），“solemn affirmation”（1例）の計6例が聖なるコンテクストにおいて，そして世俗的な祈願（2例），“emphatic assertion”（7例）の計9例が世俗的なコンテクストにおいて各々使用されている。“Marie”の呼称は，聖的であると同時に世俗的な使用にも供されているのが特徴なのである。

次に“Marie”の epithet の吟味を通して，“Marie”の姿を探る。“Marie”の epithet には3種類ある。(1)“blisful”（3例目），(2)“Seinte”[38]（4，5，6，7，8，9，13，15例目），(3)“oure”（8例目）の3つである。

これら“Marie”の3種類の epithet の内“blisful”は，“maide”，“maiden”，“virgin”の「処女」の epithet と，そして“moder”と“lady”の「母性」にまつわる epithet 双方と共通している。つまり“Marie”は，「天の栄光と至福に満たされた（“blisful”）聖母（“his mooder Seinte Marie”〔7例目〕，“oure lady Seinte Marie”〔8例目〕，“lady Seinte Marie”〔4例目〕）の姿を見せている。

“Marie”の呼称の働きや，“Marie”の epithet の吟味からは，人々によって救いを求められ，神への執り成しを求められる「聖なる，恩恵に満ちた，処女にして神の母」の姿が浮かぶ。

8

聖母マリアの6つの呼称（称号）の各々の働き，そして各 epithet と呼称との関わりにおける意味の考察を通して，次のことが言える。各呼称の働きをみてみると，6種類の呼称ともに，主として聖的なコンテクストにおいて使用されていること，特に聖母の「救い」，「憐れみ」への祈願がこめられていること，そして“Marie”の呼称の働きは聖的な場合と世俗的な場合とがあることがわかる。更に各 epithet と呼称との関わりからは，6種類の呼称を次の2つに分類できる。“maide”，“maiden”，“virgin”そして“moder”，“lady”，“Marie”の2グループである。はじめの“maide”のグループは，“moder”の

呼称とのつながりが示す“blisful”な「処女にして母」としてのマリアであり２つ目の“moder”（母性）のグループは，“blisful”な処女にしてかつMediatrixの「神の母」としてのマリアである。つまり第１のグループと第２のグループの違いは，第２のグループは「神の母」としてのマリアを明示している（勿論第１のグループは，「母性」を内包している）ことである（表１，２，３参照)。更にMarie”の呼称は，その「祈願」の働き（聖的，世俗的）からみて，この第１グループの呼称と第２グループの他の呼称とを合わせた，つまり統合した機能を持つと考えられる。

〈表１〉

	呼称の働き	epithets
１）maide	聖的	merciful, brignt, glorious, free, meeke, faire, blisful, (maide and moder)
２）maiden	聖的	free, pure, blisful
３）virgin	聖的	wemmelees, glorious
４）moder	聖的	deere, Cristes, Goddes, free, sweete, meeke kynde, bliful, glorious, (maide and moder)
５）lady	聖的	oure, bright, free, deere, ful of merci, blisful
６）Marie	聖的，世俗的	Seinte, oure, blisful

〈表２〉チョーサー作品における聖母の各呼称の出現回数

	祈願		誓言		聖母の名称として	聖母として
	聖	俗	聖	俗		
１）maide	8	0	0	1	1	10/74 (13.5 %)
２）maiden	0	0	0	0	2	2/52 (3.8 %)
３）virgin	1	0	0	0	3	4/6 (66.7 %)
４）moder	10	1	2	2	16	31/100 (31 %)
５）lady	10	1	1	5	4	21/361 (5.8 %)
６）Marie	3	2	7	1	2	(15)

〈表3〉チョーサーの3作品における聖母の各呼称の出現回数

	ABC	PrT	SN	『カンタベリー物語』の話の数
1) maide	1	2	1	7
2) maiden	0	1	1	2
3) virgin	2	0	1	2
4) moder	6	12	2	10
5) lady	11	5	0	6
6) Marie	0	2	0	9

ABC ＝"an ABC"(制作年：before 1368)
PrT ＝ *The Prioress's Tale* (制作年：after 1373)
SN ＝ *The Second Nun's Tale* (制作年：before 1386-7)
(なおこの3作品は，チョーサーにおいて聖母マリアとの結び付きが最も深い作品である。)

聖母マリアの6種類の呼称（称号）を考察し，「処女と母性」の表現から，チョーサーの作品における聖母像を探ってきた。"Marie"の呼称の働きにみる聖的な，そして世俗的な意味をもって，神の「救い」を求める人々のために神への「執り成し」をする"blisful"な「神の母」としてマリアを人々は崇敬し，求め続けていると言える。

注

1) William J. McDonald (ed.), *New Catholic Encyclopedia* (Washington : The Catholic Univ of America, 1967), "Mary, Blessed Virgin, In English Poetry" の項。
2) "a virgin, spec. of the Virgin Mary (maid Mary) ; ＝ maiden 2." (*OED* 2. a. 初出 a 1175) "the Virgin Mary (*MED* 2. [c] 初出 a 1225)
3) 聖母の呼称の引例は，Larry D. Benson, *A Glossarial Concordance to the Riverside Chaucer* (New York : Garland Publishing, 1993)にもとづき，チョーサー作品の引用は，Larry D. Benson (ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston : Houghton Mifflin, 1987) に依る。引例文中叙字体は筆者自身のものを

表す。引用文中括弧内の数字は行数を表す。

4) *The Canterbury Tales* 全般の誓言については，繁尾久『中世英文学点描』（改訂増補版)(東京：伸光社，1982年)，144～168頁（第8章『カンタベリ物語』の誓言について）参照。

5) ここで「世俗的な誓言」の世俗的とは，現世での物欲をもって願うことであるのに対し，「聖的な誓言」の聖的とは，現世にあって精神的な，あるいは霊的な救いを願うことをさす。

6) "compassionate, inclined to pity"(*MED*[b] 1例目引例)

7) "of God, angels, saints, heaven : characterized by intense brightness, effulgent; resplendent, glorious" (*MED* 1.[b])

8) "spiritually praise-worthy; worthy of spiritual glory; partaking of the glory and bliss of heaven"(*MED* 1.[b])

9) "Like a freeman; noble in character; gracious, well-mannered; noble in appearance, handsome" (*MED* 2a.[a] 9例目引例)

10) "merciful" (*MED*) 1.[c]　初出 [c 1380] 6例目引例)

11) "Pleasing to the sight; good to look upon; beautiful, handsome, attractive: (a) of persons, more often of women but freq. of men; a common epithet of angels and the Virgin" (*MED* 1a.[a])

12) "Full of the bliss and glory of heaven, glorious; glorified, transfigured, beatified, sanctified" (*MED* 2.[a]); "blessed, holy, sacred" (*MED* 2.[b])

13) 邦語聖書は，『聖書』（東京：ドン・ボスコ社，1976）に依る。民間伝承における受胎告知については，「主のお告げ」（ヤコブス・デ・ウォラギネ著，前田敬作，今村孝訳『黄金伝説』〔第1巻〕〔京都：人文書院，1984年〕，491～503頁）を参照。

14) *New Catholic Encyclopedia*, "Immaculate Conception"の項。ギリシャ教父もラテン教父も無原罪の御宿りを明示的に教えはしなかったが，フランシスコ会のヨハネス・ドゥンス・スコトゥス（1264年頃—1308年）は，マリアに原罪がなかったことと，マリアがキリスト降誕前に懐胎したことを調和させるためにキリストの功績を先取りして事前に救われたという考えを取り入れた。

（『カトリック小事典』〔東京：エンデルレ書店，昭和61年〕，292頁，「無原罪の宿り」の項)

15) 『教皇ヨハネ・パウロ二世回勅 救い主の母 レデンプトーリス・マーテル』（東京：カトリック中央協議会，1987年)，25頁。

16) 『カトリック小事典』，「恩恵」の項。*New Catholic Encyclopedia* では，Grace: "the free and unlimited favour of god as manifested in the salvation of sinners" とある。

17) カルロス・メステルス『イエスの母マリア』（東京：南窓社，1979年)，56頁。

18) 『カトリック小事典』，283頁，「マリアの処女性」の項。

19) *New Catholic Encyclopedia*, "Virgin Birth" の項。

20) "the Virgin Mary" (*OED* 2.[a] 初出 a 1035)(*MED* 2.[c] 初出 a 1150[c 1125])

21) "sexually pure, virginal, chaste" (*MED* 4.[b] 初出[c 1380] 本例引例)

22) "The Virgin Mary, the mother of Christ"(*OED* 4. 初出 a 1300) "The Virgin (also the blessed, holy, etc., Virgin) = sense 4" (*OED* 5. 初出 c 1330)

23) "withont stain of sin; undefiled, immaculate" (*OED* 1. 初出 c 1275)

24) "One who has religions authority or dignity. Often applied to the Virgin Mary" (*OED* 3. a. 初出[c 1366]30例目引例) ; "Mother of God, God's Mother: a frequent designation of the Virgin Mary in Catholic use" (*OED* 1. c. 初出 cl1122); "Applied to the Virgin Mary: as the mother of Jesus" (*MED* 3.[a] 初出 a 1150 [c 1125])

25) "of God, of persons: excellent, noble, honored, valiant."(*MED* 1.[a] 初出?c1200)

26) "Benevolent, loving, affectionate, kind" (*MED* 5.[a])

27) "of God, Christ, Mary, a saint, etc.: blessed, holy; gracious; of Christ's flesh or blood, the Virgin's body, etc.: precious, sacred; of the cross, Christ's birth: holy, divine" (*MED* 初出6.[a] 初出 a 1225)

28) *New Catholic Encyclopedia*, "Mother of God"の項。Cf. *ibid.*, "Theotokos"の項。

29) *Ibid.*, "Coredemption"の項。Cf. Coredemption を行なうマリアの moral mediation の営みは，14世紀の終りに"Coredemptrix" と呼ばれるようになる (*Ibid.*, 'Our Lady's Coredemption' in "Mary, Blessed Virgin, Ⅱ" の項)。

30) *Ibid.*, 'Mediatrix of all Graces' and "Mediator Dei" in "Mary, Blessed Virgin, Ⅱ" の項。

31) 『カトリック小事典』，「仲介者」の項。ラテン教会においては，12世紀になってマリアを "Mediatrix" と呼ぶようになる。これは St. Bernard が広めた。(*Ibid.*, "Mediation"の項) "since the title mediator belongs principally to Christ, Mary's role is a mediating of the Mediator... the Latin Church has generally understood the title as an extension to Mary of Christ's title of Mediator." (*New Catholic Encyclopedia*, "Mediation" の項)

32) *New Catholic Encyclopedia*, 'Spiritual Matternity of Mary' in "Mary, Blessed Virgin, Ⅱ" の項。

33) "Mary is mediatrix, not only as one through whom the divine gift is transmitted to men, but also as the one who, in the name of mankind, responds to the divine initiative. (*Ibid.*, "Mediation"の項) Cf. 注16。
Cf. 被昇天後のマリアについては，カトリックは次の様に教える。
もちろん，マリアが入った天国の静けさは，きわめて活動的な静けさである。
マリアは神のもとで人々のためにとりなしをし，私たちの母としての務めを絶えまなく果たしている。（中略）人々に助けの手を伸ばすこと，人々のために祈ること，神の愛の完全な鏡として人々を愛し続けること，これこそ天国におけるマ

リアの仕事であり，喜びである。神のマリアのこの祈りに無限の愛をもって応え人類の唯一の仲介者であるイエススを通して，人々を自分のもとへ引きよせ，イエススの母であり同時に私たちの母であるマリアを喜ばせるのである。(P. ネメシェギ『キリスト教入門』〔東京：南窓社，1984年〕，201頁)

34) "the Virgin Mary (usually *Our Lady* =L. *Domina Nostra*)" (*OED* 3. a. 初出 [a 900] Cynewulf *Crist* 284); "The Virgin Mary" (*MED* 4. [a] 初出 a 150 [c 1125]; 4. [b] : in oaths and asseverations 初出 [c 1395] *CT. CY.* G 1354)

35) *New Catholic Encyclopedia*, 'Mediatrix of all Graces' in "Mary, Blessed Virgin, II" の項。

36) Cf. David Hugh Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints*, 2nd ed. (Oxford: Oxford U. P., 1987), p. 290, "Mary, The Blessed Virgin" の項：The development of Marian devotion in England took another step forward in the 12th century with the collection of stories of Miracles of the Blessed Virgin by William of Malmesbury, Dominic of Evesham, and others. These stressed the *intercessory power of Mary in saving sinners*: they emphasized her role in providing hope for those who would have despaired if they had to face the Divine Judge alone. This went together with an increased awareness of the humanity of Christ, soon to be manifested in a more tender portrayal of Christ and his mother in the 13th and subsequent centuries. The later Middle Ages were the time when, again with increased awareness of the human and emotional stress of the Passion, the Blessed Virgin was invoked as Our Lady of Pity and the devotion to the Seven Sorrows of the Blessed Virgin (a pendant to the earlier Seven Joys of Mary) was developed. (Italics mine)

37) "The Mother of Jesus Christ, commonly called the (Blessed) Virgin Mary, or Saint Mary" (*OED* 1. a 初出 c 1000); "In asseverations" (*OED* 1. b 初出 c 1350) "the Virgin Mary (*MED* 1a. [b] 初出 c 1175); "In exclamations, oaths, asseverations, etc." (*MED* 1b. [a] 初出 a 1375)

38) "Prefixed as a title to the names of Christian martyrs and Confessors, canonized saints, the apostles, the evangelists, and archangels" (*MED* 2. [a] a 1225 [?OE]: Sante Marie)